2025/3/2

ルカの福音書　講解メッセージ㊻

『ルカの福音書 19 章 28-35 節　ロバの話』

「これらのことを話して後、イエスは、さらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。オリーブという山のふもとのベテパゲとベタニヤに近づかれたとき、イエスはふたりの弟子を使いに出して、言われた。「向こうの村に行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない、ろばの子がつないであるのに気がつくでしょう。それをほどいて連れて来なさい。」(ルカ 19:28-30)

なぜイエス様は、馬ではなく、誰も乗ったことのないろばを連れてくるように言われたのでしょうか。これは、誰からも見向きもされない人、能力の劣った人を象徴しています。神の目には、その人こそ高価で尊いということです。

私たちは、どのようにしたら自分の真実な姿を知ることができるでしょうか。人は、人と自分を比較して自分を知ろうとしますが、人は常に変化します。ある時は、自分が優れているように感じ、ある時は、自分が劣っているように感じます。変化するものを物差しにして、真実を知ることはできません。

私たちが基準とすべきものさしは、神です。そして、絶対なる神と自分を比較したときにわかることは、自分は無に等しいということです。多少のことができたとしても、死を迎えた時に残るものはありません。無です。これを、弱き者と言います。弱き者であるがゆえに、神は助けるのです。ろばの子は、この弱き者の象徴です。

「もし、『なぜ、ほどくのか』と尋ねる人があったら、こう言いなさい。『主がお入用なのです。』」使いに出されたふたりが行って見ると、イエスが話されたとおりであった。彼らがろばの子をほどいていると、その持ち主が、「なぜ、このろばの子をほどくのか」と彼らに言った。弟子たちは、「主がお入用なのです」と言った。そしてふたりは、それをイエスのもとに連れて来た。そして、そのろばの子の上に自分たちの上着を敷いて、イエスをお乗せした。」
(ルカ 19:31-35)

人がどう思うかではなく、神が言われることが最優先です。神が言われたことは必ず成就します。人間は、自分の理性を超えることができず、キリストのことばを信じ

られないでいます。必要なのは、乗り越える勇気です。

ろばの子の持ち主は、「主がお入り用なのです」という言葉を聞いて、すぐに従いました。信仰とは、従うことです。

> 「イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。イエスがすでにオリーブ山のふもとに近づかれたとき、弟子たちの群れはみな、自分たちの見たすべての力あるわざのことで、喜んで大声に神を賛美し始め、こう言った。「祝福あれ。主の御名によって来られる王に。天には平和。栄光は、いと高き所に。」」（ルカ 19:36-38）

人々は、イエス様を救い主としてお迎えしました。イエス様の様子は、王の凱旋とは程遠く、小さなろばに乗って、とことこと通られたにすぎません。イエス様は、ここでも徹底的につまずきの石となられました。神であるイエス様は、この世界の何物にも権威を借りる必要がありません。ですから、あえてろばに乗られたのです。しかし、この様子を見て、つまずく人たちも大勢いました。イエス様に近づこうとする人は、信仰で近づくしかありません。

> 「するとパリサイ人のうちのある者たちが、群衆の中から、イエスに向かって、「先生。お弟子たちをしかってください」と言った。イエスは答えて言われた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」」
>
> （ルカ 19:39-40）

イエス様を神と認めないパリサイ人にとって、弟子たちの行いは、神を冒涜する行為です。しかし、イエス様は彼らが叫んでいることは真実であると言われました。このことは、旧約聖書で預言されています。

> 「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。」（ゼカリヤ 9:9）

このように、神が計画しておられることは、かならず成就するのです。

「エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。」

（ルカ 19:41-42）

聖書の中で、イエス様が泣かれた場面は二つしかありません。一つは、ラザロの復活の場面です。イエス様が「ラザロは復活する」と言ったのに、誰も信じなかったため、イエス様は、人々の不信仰に涙を流されました。死人がよみがえるなど、ありえないことです。しかし、そのありえないことを信じるのが信仰です。納得できたら信じる、というのは、信仰ではありません。この時、誰一人信仰に立つ者がいなかったために、イエス様は涙を流されました。

もう一つが、このエルサレムの場面です。イエス様は、彼らが死への備えもせず、無頓着に商売をしていたことに涙を流されています。イエス様は、死への備えをしておくように何度も語ってこられましたが、肝心のエルサレムでは誰一人そのことに心を留める者がいませんでした。神が助けようとしておられるにもかかわらず、それを拒む不信仰に涙を流されたのです。

「やがておまえの敵が、おまえに対して塁を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」（ルカ 19:43-44）

これは、実際に起こることの預言です。紀元 70 年に、エルサレムはローマ帝国に包囲され、陥落します。彼らが築いた砦は跡形もなく壊されました。

私たちは自分の人生を組み立てる時に、「今」から組み立てようとしますが、それは誤りです。人生は、「終わり」から組み立てるべきです。私たちに終わりが来るのは、確実です。その時に、何を持っているべきか、そこから逆算して、今を組み立てるべきです。終わりと向き合うことなく、今楽しく生きることを追求する人は愚かであり、泣いて歯ぎしりするようになるとイエス様は教えておられます。

「宮に入られたイエスは、商売人たちを追い出し始め、こう言われた。「『わたしの家は、祈りの家でなければならない』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にした。」」（ルカ 19:45-46）

あなたは、神の神殿であるあなた自身を、強盗の巣にしてはいないでしょうか。神を第一にして生きているでしょうか。そのことをイエス様は問うておられます。

「イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長、律法学者、民のおもだった者たちは、イエスを殺そうとねらっていたが、どうしてよいかわからなかった。民衆がみな、熱心にイエスの話に耳を傾けていたからである。」（ルカ 19:47-48）

彼らがイエス様を殺そうとしたのは、イエス様につまずいたからです。殺したいほど憎むということは、それだけ彼らの心が傷ついたということですが、では、この場合、悪いのは、傷つけたイエス様でしょうか。それとも傷ついたパリサイ人でしょうか。

もちろん、イエス様が悪いことをするわけはないので、悪いのはパリサイ人です。その理由を考えてみましょう。

私たちは自分を中心に生きていますから、傷つくと人をさばきます。自分を中心としているので、悪いのは自分ではなく相手だと、何の疑いもなく判断し、相手を責めることで自分の心をいやそうとします。パリサイ人は、イエス様を殺すことですっきりしようとしているわけです。しかし、イエス様が悪いわけではありません。

人が傷つくのは、律法のせいです。人間は誰もが「～ねばならない」という律法をもって生きています。そうすると、律法に違反する者を見ると、怒りが生じるのです。たとえば、夜中の騒音に腹を立てている人に対して、騒音 1 回につき 100 万円の補助金が支払われるという法律ができたら、ほとんどの人は騒音を喜びに感じます。ということは、怒りを生じさせるのは、現象ではなく、律法なのです。

「ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。」（エペソ 2:15）

敵意は、律法によって成り立っていると聖書は教えます。私たちは人を愛するように造られていますから、愛せないとつらくなります。それなのに、人を愛することが

できないのは律法のせいです。相手が悪いのではなく、自分に問題があるのです。ところが、パリサイ人たちは、そのことに気づかず、イエスが悪いと言って腹を立てました。

そもそも、私たちが律法を持つようになったのは、愛されたいという願望があるからです。子どもは親に愛されたいと思いますから、親が「勉強しろ」と言ったら、その言葉が律法になります。すると、勉強ができない自分を責めたり、勉強ができない人をさばいたりするようになります。愛されたいという願望から、愛されるために人や社会の期待に応えようとして、律法が生まれるのです。

「こんなに頑張っているのに、上司が認めてくれない」と腹を立てるのも、律法によるものです。怒りを向ける先は上司ではなく律法なのですが、それに気づく人はいません。

愛されたいという欲求を、承認欲求と言いますが、すべての人が承認欲求を持っているのは、神が見えないからです。神は私たちを造り、一人一人を支えてくださっています。私たちの土台は神です。ですから、私たちは神の思いを知り、永遠を知っています。ですから、死に対して恐怖を覚えるのです。永遠を知らなければ、死に対して恐怖を覚えることはありません。

神が私たちを支え、愛しておられます。神は愛です。神は私たちを無条件で愛してくれています。ですから、私たちは、誰もが愛されるという喜びを知っています。ところが、悪魔がアダムとエバをだまし、二人が罪を犯したために、この世界に死が入り込みました。死というのは、有限性の運動です。その結果、この世界も人も有限性になりました。そうして、永遠性の神を見ることができなくなってしまったのです。つまり、神の愛を知っているにもかかわらず、神が見えないのです。

すると、人は、自分が悪いから神が見えないのだと思うようになります。これは、すべての人の潜在意識の中にネガティブな思いとして、存在しています。その結果、人は自分では気づいていないのですが、どうすれば神に愛されるだろうかと頑張って生きているのです。

神が見えなくなったため、人は、見えるものを神としたり、自分の理想を神としたりして、それを追い求めて生きています。そして、人から愛されることで、神から愛される自分を知ろうとしています。この「愛されたい」という願望が罪なのです。なぜなら、神の戒めは「神を愛し、人を愛しなさい」だからです。つまり、愛されたいと願うことで、人は神に逆らって生きるようになりました。いつも自分を中心にして、自分が愛されることを中心に生きています。自分が愛されるために生きているので、

人の言葉に「傷ついた」という言い方をして、人を裁くのです。これが罪です。

つまり、死が入り込んだことで、私たちの中に罪が住み着いたということです。この愛されたいという願望から、人は律法を持つようになりました。つまり、罪の力が律法なのです。

> 「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」（Ⅰコリント 15:56）

私たちを苦しめている罪というのは、死のとげなのです。あなたが悪いから罪を犯しているのではなく、死が私たちの中に入り込んだことで罪を犯すようになりました。つまり、病気です。病原菌が入り込んで、人は、本来の自分ではないものになってしまったのです。

ですから、神の福音はどこまでいってもいやしです。神はあなたを絶対にさばきません。「救い」という言葉は、ギリシャ語で「ソーゾー」と言い、「いやす」という意味があります。神はあなたをさばくために来たのではなく、いやすために来たのです。

あなたは、入り込んだ死によって苦しんでいます。人を愛したいのに、愛することができず、苦しんでいます。だから、神はあなたを助けたいのです。

ところが人は、自分が苦しむからくりを知らずに、自分がつらいのは相手のせいだと的外れな対応をしているのです。

そこで、イエス様は、律法を廃棄するためにこの地上に来られたと聖書は教えます。どうやって廃棄したのでしょうか。私たちは神に愛されようとしています。そして、愛されるためには、神の期待に応えなければならないと勘違いしています。しかし、イエス様は、人々の間に根強くはびこっている、神に認められるためにはよい行いを積むべきだという考えと戦われました。あなたに何ができるか、あるいは律法の行いに関係なく、イエス様は無条件であなたを愛し受け入れておられます。そして、あなたのためなら、いのちさえも惜しまないと示し、十字架に架かって死なれたのです。こうして私たちへの愛を明らかにし、律法を廃棄なさったのです。

> 「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ 5:8）

たとえ罪人であろうが、行いに関係なく私たちを愛しているがために、神は私たちのために死ぬことができるのです。すべての苦しみは、死が入り込んで神が見えなく

なったことから始まりましたから、神はあなたを愛しているこえことを示すために人の姿になって来られ、十字架によって、「神があなたを愛している」というメッセージを伝え、十字架を通して、律法を廃棄されました。

私たちは律法のせいで人を憎むようになってしまったため、イエス様は十字架で律法を廃棄し、神を信じれば誰でも救われるという義を明らかにしてくださったのです。

> 「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」（ローマ 10:4）

もし、あなたに憎くて赦せない人がいるならば、それは律法に惑わされています。つらく苦しい時には、イエス様の十字架を見上げ、自分が愛されていることに気づいて、律法から解放されましょう。そうすれば平安が訪れます。